

鹿児島大学大学院全学横断型教育プログラム

# 島嶼学教育コース

## 島嶼学概論I・II

### 活動報告書



三島村硫黄島



十島村中之島

平成23年度

鹿児島大学国際島嶼教育研究センター

# はじめに

近年の学問の学際化・融合化により、幅広い分野の知識と柔軟な思考能力をもつ人材が社会で求められています。この要請に応えるため、鹿児島大学は大学院を横断して体系的に履修するプログラム「島嶼学教育コース」を平成 22 年度 10 月に創設しました。島嶼学教育コースの目的は、「南西諸島からアジア・太平洋島嶼域に関する様々な分野の授業科目を履修することにより、島嶼地域の要請に応え、国際島嶼社会でも活躍できる人材育成を目指す」にあります。プログラムの所定の単位を修得した学生には、各研究科の修士の学位に加えて、「島嶼学教育コース」修了証を授与します。

このプログラムを開始するにあたり、コア科目「島嶼学概論Ⅰ：総合島嶼学」および「島嶼学概論Ⅱ：島嶼自然環境学」が新設されました。鹿児島県は離島面積および離島人口が全国第 1 位で、島の数は長崎県に次いで多く（605 島）、南北 600km に 28 の有人島が広がる全国有数の離島県です。これらの離島は、温暖で豊かな自然環境、伝統文化、郷土料理など個性に満ち、東南アジア島嶼部を含む南太平洋多島域と自然・文化的に深く結びついています。「島嶼学概論Ⅰ」では人々の生活や社会の特徴、島嶼域の振興策について、「島嶼学概論Ⅱ」では島嶼の自然環境や資源について講義をおこないます。講義を通して多島域の自然環境や文化を理解し、科学的に深い洞察力を養うことを目指しています。

「島（離島）」を学ぶ上での問題点は、「島」へ一度も行ったことがない、という学生が多いことです。そこで、学生により深く「島」を理解させるため、島嶼学概論Ⅰ・Ⅱでは講義の一部を三島村硫黄島・十島村中之島でおこないます。硫黄島・中之島の皆様から島の現状を御講義いただき、そして実際に現地を見てまわります。「島」を体験する、そして「島」を考える機会を学生に与えています。

末筆にはなりますが、三島村・十島村における講義は、三島村日高郷土村長・十島村敷根忠昭村長をはじめ、関係者の皆様（特に柿木正敏教育長、大山秀人職員、村営定期船「みしま」安永浩一船長（以上三島村）、十島村福満征一郎副村長、平泉二太議員、永田和彦議員、古橋典保氏、徳丸秀樹職員、NPO 法人トカラインターフェイス 寄田大祐氏（以上十島村））並びに島民の皆様にも多大なご尽力をいただき実現いたしました。皆様に心より感謝申し上げます。

平成 23 年 2 月 29 日

国際島嶼教育研究センター 野田伸一  
長嶋俊介  
河合 溪  
山本宗立

# 目次

講義内容	3
三島村硫黄島講義・学生のレポート	11
三島村硫黄島講義写真集	29
十島村中之島講義・学生のレポート	35
十島村中之島講義写真集	47
(参考資料) 共通教育科目「島のしくみ」(集中講義)	55

# 講義内容



# 講義内容

## 島嶼学概論 I

### 島嶼環境衛生（野田伸一 担当）

島嶼学概論 I（総合島嶼学）のイントロダクションとして、島嶼域の理解の基本となる島の特性やその区分、さらに鹿児島県の離島の状況についても学び、島嶼地域が持つ多様な地域性を理解します。健康は多くの地域で重要な関心事項です。特に島嶼地域では若年層を中心に人口減少が進み、高齢化が進展しています。島の活性化と住民の健康増進を目的とした“健康の島”づくりが求められており、

タラソセラピーなど自然環境や地域資源を活かした取り組みについて学びます。近年、新興感染症や再興感染症が世界的に大きな問題となっています。蚊が媒介するデング熱やマラリアなどは島嶼地域でも公衆衛生分野の重要な問題で、ハワイで流行したデング熱を例にして、これらの感染症が地域社会に与える影響とその対策をについて学びます。

キーワード：島の特性、タラソセラピー、感染症

### 島の経営（長嶋俊介 担当）

地域生活の営みを人文社会科学的方法で総合的にとらえる方法論について理解を深めます。[島嶼研究方法論]では、島の特異性と島から学び島に還元する研究の姿勢と方法を学びます。先学の指摘と統計的捕捉の限界、悉皆的調査利益、比較研究の優位性等についてです。[島嶼経済・経営学]では、小規模経済のメリットデメリット、隔絶性利益と交易負担（多次元）比較優位性開発、コガバナンス（共治）的主体の総合力発揮の意義等について学びます。[島嶼環境経営学]ではアイランドコンプレックス的現象、地域気象海況特質、里島＝里山・里地・里海連続

空間としての管理上の特質と管理利用上の留意点と方法等について学びます。[島嶼防災復興学]では島の成り立ちと関わる自然災害・人災類型に従った、リスク管理的総合的・個別的防災対策と生活の質的向上管理を踏まえた復興方法論について学びます。[島嶼地域おこし学]では、島の文化現象とその振興課題、離島町村制・町村合併等の地域行政の歴史的推移、国境摩擦禍による政治経済等の転換史、離島振興の歴史と方法論の推移、現在の離島苦としての多次元の過疎現象とその克服策、新海洋法のもとでの政策的方向性等について考えます。

キーワード：生活環境的総合性、優位性の開発、コガバナンス（共治）

## 三島村硫黄島における講義（野田・長嶋担当）

[ 調査事前講義・準備 ] 地域資料（硫黄島は1集落1島であるので島単位データがそのまま調査に使える、またシマダスや三島村誌・町勢要覧等から抜粋したもの等）を配布して硫黄島概況についての総合学習を事前に行います。この島は伝染病や医療面で特異な経験をしてきた場所でもあり、硫黄鉱山で栄えた歴史もあります。自然面では天然記念物保存活動が近年活発であり、文化面でも国の無形文化財保存地区であり、小さな島における保存努力もなされています。近年ではアフリカ太鼓文化の交流的導入活動やヨットレース（三島カップ）受け入れ地として地域振興にも取り組んでいます。行政的にも島側に役場がない特殊な事情を抱えています。それらの事情の基本理解で、現地で学び調査する上での足元を固めます。各自の報告書は地元に戻元するほか、ホームページ等での公開をおこないます。

[ 現地調査および講義 ] 小さな島なので村役場の協力を得て島の主要個所を車と現地説明者随行で説明を受けつつ概観し

ます。事前に、知りたい、あとでまとめたい内容についての質問事項などは準備してください。訪問予定箇所希望（事前確認）も配慮します。

[ 現地訪問及び現地説明 ] 飛行場・鹿児島市教育研修施設（元リゾート施設）・露天風呂所在地・産業遺産（鉱山跡地）・ジャンベスクール（宿泊予定地）・郷土歴史文化資料施設（俊寛堂・熊野神社展示資料）・三島総合開発センター資料室）・三島小中学校・特産品加工施設（大名竹筍加工所）・牧場・観光施設（展望所）等を予定しています。

[ 地元関係者レクチャー ] 現地関係者の協力を得て、レクチャー並びに質疑応答できる場を設けます。1. 伝統文化継承などに関わる話、2. 産業史と現在の核になる産業である牧畜・漁業に関する話、3. 教育にかかわる取り組み、4. ジャンベスクールや地域活性化に関わる話、5. その他（行政と関わるものについても対応できるように協力していただく予定です）。

[ 各自自由行動調査 ] 出航までの時間を活用し、自由行動調査時間とします。

キーワード：地域理解、提言根拠、島嶼メリット

## 受講者名簿

- ・植村潤一（理工学研究科 M2）
- ・北野克明（農学研究科 M2）
- ・舟久保 昇（人文社会科学研究科 M2）
- ・伊藤彰宏（農学研究科 M1）
- ・武田 健（教育学研究科 M1）
- ・中尾 智（水産学研究科 M1）
- ・箕田佐友里（農学研究科 M1）
- ・吉田創平（水産学研究科 M1）

■科目名			
島嶼学概論 I Island study I			
開講年度	実施研究科区分	コース等	担当教員の研究科等
2011	大学院全学共通	島嶼学教育コース	人文社会科学研究科
単位数	実施期	前後期	授業形態
2	1期	前期	毎週
■担当教員			
野田 伸一 長嶋 俊介			
■代表者教員連絡先等			
【所属】 国際島嶼教育研究センター 【研究室】 総合教育研究棟5階 【Mail】 野田伸一：snoda@epi.kagoshima-u.ac.jp			
■講義の概要（目的と内容）			
島嶼学概論Iと島嶼学概論IIは島嶼学コースのコア科目で修了のための必須科目である。 東南アジア島嶼部を含む南太平洋多島域は、文化的、自然的に連なるスペクトラムである。この多島域は大小様々な島々からなり、自然環境は変化に富み、人々の生活ぶりはその自然および歴史に根ざした感化環境と深く結びついている。日本も太平洋に面し、多くの島々からなる島国で、南太平洋多島域と自然的、文化的に深く結びついている。鹿児島県は長崎県に次いで島の数が多く（605島）、南北600kmに28の有人島が広がる。離島面積と離島人口は全国第1位で、有数の離島県である。これらの離島は、温暖で豊かな自然環境、伝統文化、郷土料理など個性に満ちた島々である。 これらの多島域を多面的に理解し、深い洞察力を養うことを目指している。			
■授業の到達目標及びテーマ			
日本から太平洋に至る島々に関して人々の生活と社会の特徴や島嶼域の振興施策について理解する。			
■授業計画			
<ol style="list-style-type: none"> <li>日本の島嶼域における諸問題 1</li> <li>日本の島嶼域における諸問題 2</li> <li>日本の島嶼域における諸問題 3</li> <li>日本の島嶼域における諸問題 4</li> <li>日本の島嶼域における諸問題 5 日本の島嶼地域がかかえている問題について、特に人や社会の面から講義を行う。</li> <li>太平洋島嶼における諸問題 1</li> <li>太平洋島嶼における諸問題 2</li> <li>太平洋島嶼における諸問題 3</li> <li>太平洋島嶼における諸問題 4</li> <li>太平洋島嶼における諸問題 5 太平洋の島嶼地域がかかえている問題について、特に人や社会の面から講義を行う。</li> <li>三島村を多面的に捉える（硫黄島で講義） 1</li> <li>三島村を多面的に捉える（硫黄島で講義） 2</li> <li>三島村を多面的に捉える（硫黄島で講義） 3</li> <li>三島村を多面的に捉える（硫黄島で講義） 4</li> <li>三島村を多面的に捉える（硫黄島で講義） 5 土日を使ってフェリーみしまで硫黄島に出行かけて講義を行う。 産業・医療・教育などについて島の状況について理解を深める。</li> </ol>			
■受講要件			
1/3以上の欠席は評価対象外とする。講義の一部を三島村の硫黄島で実施するが、この講義への出席は必須とする。			
■成績の評価基準			
講義内容に関係したレポートの提出を3回予定している。このレポートで成績の評価を行う。			
■テキスト・参考書・教科書			
ミクロネシアを知るための58章（印東道子編著、明石書店）			
■オフィスアワー・その他			
講義開始時に指示します。			



## 島嶼学概論 II

### 沿岸環境（河合 溪 担当）

世界には多くの島が存在しますが、それぞれの島によってその島の形成過程は異なっています。そして、大陸と比べると島は狭小性という特徴をもっています。そのためそこに生息する生物は、その小さな環境での小さな環境変動に強く影響を受けて生息しています。また、島に生息する生物のなかには固有種や遺伝的に他の地域と大きく異なっている集団が多く、それらは特徴的な形態や行動を持つ

ものが多いです。本講義においては、様々な島の形成過程を理解し、異なる形成過程によって形成される様々な島の自然環境についても理解を進めます。そして、地域固有な生物の生態の理解を進めると共に、その様な特徴的な形質を持つようになった適応的な過程についても理解を進めます。最後に、島の周りで見られる海洋環境における生物の相互関係についても理解を進めます。

キーワード：生物多様性、海、サンゴ

### 陸の資源（山本宗立 担当）

隔絶した小島嶼においては、島内での食糧・薬・工芸作物の確保が非常に重要です。自然災害や社会変化によって、島外からの資源に長期間頼ることができない状況がよく発生するにも関わらず、多くの島では輸入資源に依存した生活に変化しています。フードセキュリティの観点から、島嶼部における有用植物を知ることが非常に重要となります。

そこで、まず島嶼部における作物の特徴を理解するために、私たちが日常食べ

ている作物の起源地を学ぶとともに、島嶼部の「根菜農耕文化複合」を理解します。次に、植物（だけではなく生物）が資源としてどのように利用されているかを民族植物学的視点から学びます。そして、島嶼部における現地調査の写真を通して、その生き生きとしたおもしろさを肌で感じてもらうとともに、写真見て何を読み取ることができるのか、深い洞察力を養います。

キーワード：根菜農耕、栽培植物起源学、民族植物学

## 中之島における講義（河合・山本担当）

鹿児島大学大学院全学横断型教育プログラム「島嶼学教育コース」の目的は、「南西諸島からアジア・太平洋島嶼域に関する様々な分野の授業科目を履修することにより、島嶼地域の要請に応え、国際島嶼社会でも活躍できる人材育成を目指す」にあります。しかし、「島」へ行ったことがない、という学生も少なくありません。そこで「島嶼学概論Ⅱ」では、

「島」をより深く理解するために、講義の一部を十島村中之島でおこないます。中之島の島民の皆様から島の現状（教育、農畜産、漁業、Iターン）についての講義を受けます。また、実際に中之島を見てまわることで、「島」を体験する、そして「島」を考える機会を設けています。

キーワード：鹿児島県、十島村中之島、フィールドワーク

## 受講者名簿

- ・伊藤彰宏（農学研究科 M1）
- ・武田 健（教育学研究科 M1）
- ・箕田佐友里（農学研究科 M1）
- ・吉田創平（水産学研究科 M1）

■科目名			
島嶼学概論 I I Island study II			
■開設年度	■実施研究科区分	■コース等	■担当教員の研究科等
2010	大学院全学共通	島嶼学教育コース	農学研究科
■単位数	■実施期	■前後期	授業形態
2	2期	後期	毎週
■担当教員			
河合 溪 山本 宗立			
■代表者教員連絡先等			
【所属】 国際島嶼教育研究センター 【研究室】 総合教育研究棟5階 【Mail】 河合 溪 : kkawai@cpi.kagoshima-u.ac.jp			
■講義の概要（目的と内容）			
<p>島嶼学概論IIは島嶼学概論Iと同様に島嶼学コースのコア科目で修了のための必須科目である。</p> <p>東南アジア島嶼部を含む南太平洋多島域は、文化的、自然的に連なるスペクトラムである。この多島域は大小様々な島々からなり、自然環境は変化に富み、人々の生活ぶりはその自然および歴史に根ざした感化環境と深く結びついている。日本も太平洋に面し、多くの島々からなる島国で、南太平洋多島域と自然的、文化的に深く結びついている。鹿児島県は長崎県に次いで島の数が多く（605島）、南北600kmに28の有人島が広がる。離島面積と離島人口は全国第1位で、有数の離島県である。これらの離島は、温暖で豊かな自然環境、伝統文化、郷土料理など個性に満ちた島々である。</p> <p>これらの多島域の環境や資源を理解し、科学的に深い洞察力を養うことを目指している。</p>			
■授業の到達目標及びテーマ			
日本から太平洋に至る島々に関して人々の生活と社会の特徴や島嶼域の振興施策について理解する。			
■授業計画			
<ol style="list-style-type: none"> <li>沿岸環境1</li> <li>沿岸環境2</li> <li>沿岸環境3</li> <li>沿岸環境4</li> <li>沿岸環境5 日本の島嶼地域がかかえている問題について、特に環境の面から講義を行う。</li> <li>陸の資源1</li> <li>陸の資源2</li> <li>陸の資源3</li> <li>陸の資源4</li> <li>陸の資源5 太平洋の島嶼地域がかかえている問題について、特に資源の面から講義を行う。</li> <li>十島の自然を多面的にとらえる1</li> <li>十島の自然を多面的にとらえる2</li> <li>十島の自然を多面的にとらえる3</li> <li>十島の自然を多面的にとらえる4</li> <li>十島の自然を多面的にとらえる5 土日を使ってフェリーとからで中之島に行出かけて講義を行う。 産業・医療・教育などについて島の状況について理解を深める。</li> </ol>			
■受講要件			
1/3以上の欠席は評価対象外とする。講義の一部を十島村の中之島で実施するが、この講義への出席は必須とする。			
■成績の評価基準			
講義内容に関係したレポートの提出を3回予定している。このレポートで成績の評価を行う。			
■テキスト・参考書・教科書			
『日本一長い村トカラ』（長嶋俊介・福澄孝博・木下紀正・升屋正人、梓書院、2009） 『貝のミラクルー軟体動物の最新学』（奥谷喬司、東海大学出版会、1997） 『オーストロネシアの民族生物学』（中尾佐助・秋道智弥編、平凡社、1999）			
■オフィスアワー・その他			

三島村硫黄島講義・  
学生のレポート



## ○三島村硫黄島講義・学生のレポート

### ☆三島村硫黄島講義の概要

「島嶼学概論 I」では島を理解してもらうために、講義の一部を三島村硫黄島でおこなっています。講義は鹿児島と三島村の3島を結んでいるフェリーみしまが出港した時から始まります。1泊2日の短い期間ですが、島の地理・歴史・生活を体験することができます。また、行政・教育・畜産業・農業・漁業・文化活動などについて島の方に講義や話をさせていただきます。

なお今年はお発に当たり船内で日高郷土三島村村長から「小さな島々らしい個性と暮らしぶりそして伝統・文化を大切にしたい村政」の方向性についての訓示をいただき、柿木正敏教育長とでお見送りいただきました。さらに、随行者として大山秀人職員の派遣のほか、村営定期船「みしま」安永浩一船長や船員による船内見学及び諸説明・質疑応答にも対応していただきました。三島村の全面的支援とご協力に厚く感謝いたします。

日程：平成23年7月9日（土）～10日（日）

参加者：植村潤一（理工学研究科 M2）

北野克明（農学研究科 M2）

舟久保 昇（人文社会科学研究科 M2）

伊藤彰宏（農学研究科 M1）

武田 健（教育学研究科 M1）

中尾 智（水産学研究科 M1）

箕田佐友里（農学研究科 M1）

吉田創平（水産学研究科 M1）

担当教員：野田伸一（国際島嶼教育研究センター）

長嶋俊介（国際島嶼教育研究センター）

講義： 「三島村の状況」（大山秀人先生）

「島の教育」（森山新二・有馬健一先生）

「ジャンベ体験」（徳田健一郎先生）

見学： フェリー三島

三島小学校・中学校

軽の大臣の墓

冒険ランドいおうじま

畜産施設

大浦海岸

恋人岬展望台

ジャンベ体験

東温泉

平家城展望台

坂本温泉

俊寛堂

## ☆学生のレポート

植村 潤一 (理工学研究科)

### (1) はじめに

私は今回、初めて三島村の硫黄島を訪れさせていただき、様々な経験や島民の方々との交流などを通して、様々なことを学ばせてもらいました。昨年、実習で十島村の中之島には行かせてもらったのですが、同じような人口の離島でもまた違った印象を受けました。

私は生まれてからこれまで 23 年間も鹿児島島にいたので、実習に行く前から三島村を知ってはいました。しかし知っていることといえば、港の中が赤いことと、ジャンベが有名なことと、露天風呂があることだけでした。実際に行ってみて様々な歴史や観光資源があることを知り、とても魅力的な島であることを再認識させられました。

### (2) 硫黄島実習

フェリーみしま乗船後、役場の方々に三島村の概要を伺い、とても村おこしに積極的で様々なところで村の復興に努力されていることが伝わってきました。その次に船の操舵室を見学させてもらい、初めて自分の目で見る操舵室に感動しました。海が一望でき眺めも最高で、ぜひもう一度入ってみたいと思いました。しかしそこで、いつも乗客が 40 名程度で赤字運航であるという現実を知り、離島の厳しさを目の当たりにしました。

乗船して 3 時間半ほど経つと、山肌がむき出しになってまさに断崖絶壁の硫黄島が見えてきました。そして、硫黄島港に近づくとつれ、徐々に赤茶色の海水が目に入ってきました。何も知らないで訪れた人は必ず驚くであろう光景でした。

私もテレビなどで映像は見たことがあったのですが、実際に自分の目で見てみて本当に驚きました。昔の人が黄海ヶ島と名付けたのも納得ができました。

硫黄島到着後、三島小中学校を見学しました。生徒のほとんどが島外の人でもともと硫黄島出身の子供は少ないということでした。高校がないので中学校を卒業したら島の外に出ないといけないということだったので、人口減少は仕方のないことだなと思いました。

次に冒険ランドで施設を丁寧に説明してもらいながら見学させてもらいました。とても立派な研修施設で、周りの景色もきれいで、さらに格安な利用料に驚き、私もぜひ利用してみたいと思いました。離島という環境で子供たちがのびのびと自然を体験できる素晴らしい施設だと思います。ぜひ利用者を増やして積極的に活用されることを期待しています。

そのあとに島を車で見学して、ジャンベスクールでジャンベ体験と留学生の方々の生演奏を聴かせていただきました。実際にジャンベを触ったのは初めてで、演奏してみても自分のセンスのなさがわかりました。しかし、留学生の方々の生演奏はとても素晴らしく、初めて聞いたジャンベの演奏に心躍りました。アフリカの音楽に関して全く知らなかったのですが、自然とアフリカのイメージが湧いてきました。ジャンベを通して村おこしする取り組みは素晴らしいことだと感じました。さらにジャンベの素晴らしさを広め、活気ある村づくりに取り組んでもらいたいと思いました。

露天風呂の東温泉は本当に海のすぐそ

ばにあって、最高のロケーションで温泉好きの私にはたまりませんでした。夜に行ったらまた星がきれいに見えるということだったので、ぜひ次回は夜に行ってみたいです。素晴らしい観光資源で観光の目玉にして島の観光を盛り上げてもらいたいと思いました。

夜はジャンベスクールの留学生や島の方々との交流会を開いていただきました。島の住む方々と直に話すことができ、とても有意義な時間を過ごさせていただきました。島の厳しい現状を聴くことができ、やはりこのままでは人口の減少は避けられないと感じました。

### (3) 硫黄島実習を通して

私が硫黄島実習を通して、このままの状況が続けば人口減少が進んでしまい、最終的に離島は無人島化してしまうのではないかという危機感を強く感じました。交通の不便さが島での生活の不便さに直結し、島の経済の厳しさに繋がります。島の中に仕事がない若者は島を出ざるを得ない状況になってしまいます。国や県

はこのような状況を変えていくために積極的に支援すべきだと私は考えます。離島の存続は離島だけの問題ではなく、領土・領海を守るために国が全力を挙げて取り組む問題であると思います。私自身も離島に関わった人間として、離島の素晴らしさや厳しい現状を人々に伝え、理解を深めていくことによって、少しでも離島振興の手助けが出来れば良いなと思いました。

### (4) 最後に

今回の実習でお世話になりました三島村の島民と関係者の皆様、お忙しい中、私達のために貴重なお時間を割いていただき、誠にありがとうございました。とても楽しく、有意義な時間を過ごすことが出来ました。これからも島の経済や観光が活性化するための様々な取り組みに期待しています。機会があったら、ぜひもう一度硫黄島を訪れたいと思っていますので、そのときはよろしく願います。本当にありがとうございました。

## 北野 克明 (農学研究科)

私は今回の硫黄島の講義を通じていろいろなことを学ばせてもらいました。私はこれまで調査や島嶼学概論Ⅱの中之島講義で、奄美大島や屋久島、中之島へ行ったことがあり、島は今回で4回目になります。これまでの島に行った経験から、それぞれの島で、生活環境や自然、そしてそこに住む人々は島それぞれで違って、今回の硫黄島ではどんな経験ができるんだろうと楽しみでした。

三島村は竹島、硫黄島、黒島からなっており、硫黄島に着くまでに竹島に先に寄港したのですが、竹島は海が綺麗で透

き通っていました。それと比べ、硫黄島は温泉が湧いているため海が赤褐色で島によって海も違うということが印象的でした。

また、今回宿泊させて頂くジャンベスクールは港から車で移動したのですが、道幅は狭く信号機もなかったことが中之島と同じでした。また港は十分広く、これは後で知ったのですがジャンベスクールの留学生の人たちが着港の手伝いをしており、島の人々が協力していることも中之島と同じでした。

到着した私たちはまず三島小中学校へ



行き、教育活動や教育環境などについて話を聞きました。その中で、教育活動の一環としてジャンベを毎週行っているということに驚きました。実際、私たちが滞在している間にもジャンベの音が聞こえてきたのでそれほど熱心な活動なのだということを感じさせられました。また、英語の有馬先生の話の中で子供たちの人数が少ないため一人一人の様子がよく見えるということは、鹿児島本土でたくさんの子供たちがいる学校より子供たちにとって大きな利点であると感じさせられました。

中之島では学校には訪問しましたが、先生方からこのような話は聞くことができなかつたので聞くことができよかつたと思います。

次に冒険ランドいおうじまに向かいました。ここは南の島における実体験を通じて豊かな心とたくましさを養うことにより、青少年の健やかな育成を図るため建設されたものだそうで、ここではこの施設についての説明や、実際にツリーハウスや組立テント、炊事棟などを見学させてもらいました。敷地はとても広かつたのですが、綺麗に管理されており、また使用料もとても安く遠足などには最適な場所でした。港からもそれほど遠くなく、周りが雄大な山々に囲まれているので、歩いて自然を楽しみながら向かうのもいいのではないかと感じました。

次に畜産農家の方の話を聞きました。畜産をしているところは硫黄島には4軒あるそうで300kg前後が出荷に理想的であるということや、発情期には朝からずっと観察しているということなど大変さが感じられました。特に、出荷の際にはフェリーに乗せていくそうで中之島で畜産の話聞いたときにも感じたことですが、ここが鹿児島本土との大きな違いで

あると考えさせられました。

次に大浦港へ向かいました。海がエメラルドブルーでとても美しく、底まで突き通っておりとても綺麗でした。次に恋人岬公園へ向かいました。永良部崎の先端にあつたので周りを見通すことができとても気持ちのよい所でした。

次にジャンベスクールに戻りジャンベを体験させていただきました。基本の3つの音を教わつた後、リズムに合わせて叩きました。しかしなかなか上手くリズムに乗れず、また音もきれいな音が出ず難しいものでした。その後留学生の方々の演奏を聞かせてもらったのですが、まだ始めて1か月くらいしか経っていないにも関わらず演奏として成り立っておりそれだけ練習しているのだと感じました。また夜の交流会の時にも聞かせてもらい、その時は演出にも凝っていてさらに深みのあるように聞こえました。留学生の方々はいろいろな場所から来ていて、それぞれみんな叩いているときはとても楽しそうで、今でも頭の中に残っています。

そして当本日最後に、東温泉へ行きました。ここは、もう海との境目にあり、私たちが行つた時は波も強く温泉に浸かっている私たち上から降り注ぐほどでした。温泉自体はとても暖かく、景色の良さと合わさつて一日の疲れを癒されました。

次の日、最初は平家城跡に向かいました。ここも恋人岬公園と同じで景色がよく周りには自然が広がっており、とても気持ちのいい場所でした。

次に坂本温泉へ向かいました。ここも東温泉と同じく海沿いにあり景色もよく、漬かりはしませんでした。とても気持ちよさそうでした。

最後に俊寛堂へ向かいました。ここでは、平家討伐を企てたとの罪で硫黄島に

流刑となった俊寛についての話を聞きました。俊寛祭という祭もあり、また中村勘九郎一門の上演を行い、三島開発総合センターの前にも海へと手を伸ばす俊寛の像が建てるなど島づくりの一環として俊寛の話を活用しており、熱心さがとても伝わってきました。

私は今回の硫黄島講義を通じて、島の振興について考えました。島には硫黄岳などの豊かな自然や温泉、そしてジャンベがあり、島の強みを生かしていくこと

が大事だと思いました。また、島全体が協力して強みをさらに強くするということや、またどのようなものでも試み、失敗しても挑戦し続ける気持ちを持つことが大事だと思いました。

最後に今回お世話になりました硫黄島の皆さん、ありがとうございました。自分にとってとてもいい経験ができたと思っています。今度また硫黄島に伺った際には宜しくお願ひします。

## 舟久保 昇 (人文社会科学研究科)

島の魅力を外部の人に向けて発信するためには三島村に限らず、まず島にきた観光客や、まだ訪れたことのない人々が島にもつイメージを島民の方としても把握することが必要になる。とりわけ、目立った観光資源に乏しい離島においてその必要性は上がるだろう。

とはいえ、島に住んでいては自分たちの島に対してなかなか認識の及ばない部分もある。そこで本レポートでは、硫黄島を初めて訪れた筆者が印象づけられた事柄を述べてみたい。1泊2日の現地研修では島に滞在する時間も短く、島内部のことへ踏み込んだ意見をすることは及ばない日程ではあったが、その代わり第一印象としての硫黄島を述べるができる。これは硫黄島を訪れたいずれの人々に当てはまることだが、まず島に降り立ったときの印象、それも感覚的なレベルで抱いた印象というのは、少なからず島が観光客に見せる表面の顔を顕しているともいえる。

### (1) 「心の観光」をめざして

「心の観光」とは、フェリーみしまが鹿児島港を出港する際に、サロンにて三

島村村長が語った言葉による。村長の語られた「心」というのは様々な解釈ができるが、ここでは「感情を揺り動かすもの」と捉えて、今回巡見したところが与えた印象を自分なりに述べてみると以下のようなになる。

1. 露天風呂（東温泉）…雄大さ（波濤・大海原）／秘（秘湯）／満足感
2. 海…驚き、奇妙さあるいは幻想的（赤い海から青い海へ。或いは世界屈指の海であること）
3. 俊寛伝説…哀／無念
4. ジャンベ体験…楽／笑
5. ジャンベの送迎…感動的（島を離れるフェリーの演出に華を添える）切なさやありがたさ
6. 硫黄岳…雄大さ／奇妙さ
7. クジャク…珍しさ

このようにみると、硫黄島には観光客に与える感動の諸相が様々であることがわかるまた今回は見るができなかったが、メンドンや柱松をはじめとした祭りには秘祭イメージがある。そして島民と接する機会があることも、真の「心の

観光」にとって必要なことではないだろうか。もっともそのためには、観光客側がモラルとマナーを遵守することが求められるので、来島者への注意事項等の情報提供をする必要がある。

こうした「心の観光」を目指すことの利点のひとつには、少なからず、島が人間の感情の内部に汲み入ることができる可能性を示している。それはハコモノ施設と同じような一元的な「観光資源」として処理してしまうには質が異なる部類になるだろう。なぜなら観光客と島側の意見の相互作用によって成立する事柄だからである。

また、「心の観光」を三島村全体で掲げることは、それぞれの島ごとにおいて歴史や自然環境が異なるために、お互いの島の特色を活かせる強みともなり得る。あとはそれをどのように伝えるかが課題になるだろう。島の魅力を表面的に紹介しただけのパンフレットでは伝えきれない部分もある。なので、より一層の情報提示が求められる。散見したところでは、名所の入り口にたつ看板の劣化などは早急に改善することが望まれる。

#### (2-1) 島の物産を活かす…イスズミの例

旅荘「ほんだ」さんにて夕食を頂いた。料理は島で捕れた魚を中心とした献立であったが、そのなかでもイスズミを使っている料理が目にとまった。イスズミは基本的にはその磯臭さ故に流通しない磯魚であり、都会でこれを食する機会は皆無とっていいだろう。しかし、「ほんだ」さんのイスズミは臭みもなく味のしっかりした上品な磯魚であった。

イスズミは一般にいえば無価値魚である。しかし、それ故に「島でしか食べられない魚」そして「都会にないもの」であり、特産品となり得る可能性を秘めて

いるのではないだろうか。島民の日常食に用いられる食材は、本人達には価値を見出しづらいかもかもしれない。けれども、そうした食材こそが「硫黄島らしさ」を演出する要素でもある。こうした無価値魚ほど、島で食べることが出来る故の付加価値としてのイメージは、観光客にとって食味以上に物珍しさや新鮮さといった感動を与えることを留意しておく必要があるだろう。無価値魚を有効利用することは、ひいては魚資源の有効利用にも繋がる利点もある。

- ・ 地元の食材（イスズミ）：無価値魚＝特産／島でしか食べられない魚
- ・ 無価値な食材を島内で有価値物へ転換させる＝資源の有効利用
- ・ “都会にないもの”＝イスズミなどの磯魚・大名竹

#### (2-2) 島の物産を活かす…竹

島中に蔓延る竹といえども、場所によっては空間演出の材料となりうる。特に俊寛堂へ続く竹の小道は、鬱蒼としたなかに曲がりくねる苔むした地面に調和していて、南の島であることを忘れさせる印象を与えた。そしてそれが悲話なる俊寛伝説の舞台の地であるということが、訪問する者にとって尚さら神妙な気にさせる。このように空間演出としての資源の利用は他にも用途がありそうに思える。

#### (3) おわりに

以上、短い報告ではあるが、筆者が硫黄島研修にて感じ得たことを書いてみた。第一印象としては、鹿児島から片道4時間程度の丁度よい船旅に加えて、訪れる人の感性を満たす名所や景色が島のなかにバランスよく点在しているために、1泊の旅程であれかなりの充実感を得られ

た。これらを観光資源として捉えて新たな措置をとるか、あるいは現状のままにするかの選択は島民の方々の意見に委ねたい。あくまで観光とは島民の方々のコンセンサスを得られなければ必ず行政や

観光客側とのあいだに齟齬や軋轢が生じるだろう。したがって、本レポートはあくまで、「ある観光客の一見したところの硫黄島の印象」程度に留めて参考にしていただければ幸いである。

### 伊藤 彰宏 (農学研究科)

今回の硫黄島での講義を通じて、私が想像していた以上に硫黄島の人たちの生活が充実しているように思いました。今まで、このような小さな離島を訪れた経験がなかったので、大変いい経験をさせていただきました。島の人たちは、同じ鹿児島県でも本土や種子島・屋久島のような大きな島に比べライフラインや交通面などで不自由な面も多いみたいでしたが、島の文化や環境を大切にし、またそれらを生かして生活していることがよく分かりました。

まず文化の面では、西アフリカ・ギニアの太鼓であるジャンベによって島興しを進めていて、全国からジャンベスクールに留学生を受け入れていました。年々、ジャンベスクールの留学生の応募が増えてきていて、これをきっかけに若者が島にやってくることで、島にも活気が溢れているように感じました。また、留学生達は島の地域活動にも積極的に参加し、島の人たちとも隣人のような親しい関係を築いていて、小さい島だからこそ見られる素晴らしい光景だと思いました。また、ギニア出身の世界的なジャンベ奏者であるママディ・ケイタがほぼ毎年、ジャンベ教室のためにこの島を訪れ、ジャンベを通じて島の人たちと交流しています。その影響で、子どもたちは学校に部活やクラブが制約的である中でジャンベを練習し、さまざまな場所で演奏会も開いています。ジャンベを利用して島全体

を盛り上げることで、ジャンベはこの島の人達の生活の一部になっていることが分かりました。私もこの島に来るまでジャンベについて知らず、今回初めて叩かせていただきました。最初はリズムや叩き方で少し苦労しましたが、やっているうちに楽しくなり、踊りも加えて演奏している留学生の姿はとても楽しそうでした。こうした交流を続けていることを日本中に発信することで、ジャンベに興味をもつ人が増え、より一層島も活気づくのではないかと思います。

また、毎年8月に開催される外洋ヨットレース大会「MISHIMA CUP」も開催され、三島村の大イベントにもなっていて、湾内には多くのヨットが停泊し、とても盛り上がるということでした。

次に、観光資源に関しては硫黄島の自然そのままを生かしたものがほとんどで、特に島の特産品であるツバキは道沿いの至る所に見られました。これらのツバキは、ツバキ油を搾取して商品化し、島の重要な特産品になっています。しかし、島には収穫したツバキを搾取する施設はなく、島外に運んで加工すると聞いて、今注目されているツバキ油を島内で生産・加工できれば、島民の雇用場所も増えるので、新しい産業として利用できるのではないかと思います。また、硫黄島の地下から湧き出る温泉を利用した天然露天風呂である東温泉と坂本温泉があり、秘湯ファンの中で人気を集めている

ことや、野生の孔雀をすぐそばで見ることができるとには驚きました。目立った人工物はほとんど見られず、自然をそのまま生かしているところはとても良いことで、これらの珍しい観光資源を生かせれば、今後、島が発展するきっかけになるのではないかと思います。

他にも、俊寛像や安徳天皇御陵、平家城跡など島の歴史を学べる史跡も整備されていて、観光資源として有効に活用できるのではないかと思います。ただ、交通の面では週3回就航している船が主な交通手段となっていて、天候の良し悪しによって出航・欠航が左右されるため、観光振興のためにはこの課題は急務であることも分かりました。

教育面では、しおかぜ留学制度を取り入れ、島外から小中学生の受け入れを行っていました。今の教育現場の問題としては、小中学生の多くが赴任している教員の子供やしおかぜ留学の子供たちで、島出身の子供が減っているということ

です。しかし、子供が少ないため教員の目が全員に行き渡るという利点もあり、一人一人の学力にあった教育方法を考え、実行しているということが分かりました。また、中学校を卒業すると高校進学のために島外へ出ていく生徒もいて、その後島に戻ってくるということが少なくなっているという現状があります。この原因は、島の経済的な面の問題が大きく、一昔前のように産業が十分に発達しておらず、収入源の確保が難しいからではないかと感じました。また、本土と隔絶された小離島では企業の誘致も難しいなどの問題もあることが分かりました。

最後に、今回の講義でお世話になった方々、お忙しい中、本当にありがとうございました。日本の都道府県の中でも島の多い県の一つである鹿児島県に来て、実際に離島の様子を見て学ぶことができたのはとても貴重な経験でした。これからは今まで以上に島に興味を持ちながら、学んでいけたらと思います。

## 武田 健 (教育学研究科)

7月9日(土)～10日(日)にわたり、大学院全学横断的教育プログラム「島嶼学育コース」の講義として硫黄島を訪れた。教育学研究科で英語教員を目指し、将来は離島勤務を希望している自分にとっては、離島教育の事について知る重要な機会となった。

硫黄島・三島小中学校(中学校)生徒数は、総数10名(内、しおかぜ留学生在が3名)である。学年別の生徒数は、4名(1年)・4名(2年)・2名(3年)の構成になっている。(平成23年5月1日・現在)。鹿児島県特有の極小離島学校である。

離島の学校における英語科教育について興味があった私は、硫黄島の三島小中

学校で英語を指導している先生から離島教育(英語)の現状について、話を伺う事が出来た。

以下、三島小中学校英語科の先生に伺った話をもとに、離島教育についての課題と展望を述べる。

### (1) 離島の学校に関する課題

硫黄島は、鹿児島県に属する他の離島とは違う特徴を持つようである。まず、船が2日に1回しか来ないのが特徴の1つである。この為、学校への荷物も同様に2日に1回しか来ないのが現状である。結果として、離島のイメージとは真逆の時間的には厳しくなる傾向がある。これ

は、児童・生徒への教材が届くまでの時間がかかり、全国統一テストなどを本土へ送るときも前もって準備を行い、迅速に対応する必要が求められると考えられる。

また、コピー機が硫黄・潮風の影響で壊れることが多いにもかかわらず、修理業者は年に1回しか来る事が出来ない事態になっているという。学校教育においては、児童・生徒に対して教材を配布する事は避けられない。コピー機が使えないことは、授業の非効率化につながると考えられる。

よって、学力保証の観点からも、教材の配達スピードと学校設備の充実化は離島学校において特有の問題と言え、教師の計画的な行動が児童・生徒の学力保証につながる可以说。

## (2) 離島における授業的利点

離島の学校において特徴的なのは、生徒の数が少ない事である。一般的なクラス(本土)の人数が平均30名以上であるのに対し、三島小中学校(中学部)では最高でも4名である。よって、生徒一人一人の様子は十分に把握できると言える。よって、きめ細やかな指導が全ての生徒に対して可能である。また、地域との連携も密であり、島全体で、生徒を教育しているとも言える。

英語学習に関して言えば、少人数であることを活かし、誤答分析(学習者の間違いの原因を調べ、その間違いに対する策を考える事)を用いて生徒一人一人の弱点(苦手な部分)を抽出し、その部分に焦点を置き、強化する方法が取られている。誤答分析を用いることで、時間を無駄にすることなく、弱点の補強が可能である。誤答分析の活用により、三島小中学校の生徒の英語の学力は向上してい

ると言える。(平均20点以上の得点率の増加)人数が少ないからこそ、教師は生徒一人一人に対して、誤答分析を行う事が可能であり4技能(Listening・Speaking・Writing・Reading)のそれぞれの不得意分野における弱点の学力向上に努めることが可能である。離島の学校における学力低下問題を改善策は少人数による誤答分析にあると言ってよい。

さらに、毎週1時間、授業以外に英語の補習を行っている。この時の補習内容としては、現在行っている授業内容ではなく、過去(1年前の学習内容)の復習を行っている。この理由としては、単語→文法の順で理解が困難になる傾向が強いためであるようだ。これも、誤答分析を用いた事により、導き出された結果であり、学力向上に効果的である。

硫黄島の英語教育を考える時に注目すべき点は、中学1年生段階では英語の授業に対するモチベーションが高い事である。これは三島村(以後全て、硫黄島を含む)における西アフリカ・ギニアの楽器“ジャンベ”との接触が大きく影響していると考えられる。

平成6年から交流を行っており、三島村を代表する音楽と楽器になっている。平成11年には三島村の子どもたちをギニアに派遣するプログラムも行われている。平成13年には、ドイツやベルギーでジャンベ演奏会を行い、ヨーロッパにおける国際交流も盛んである。また硫黄島にはジャンベスクールがあり、ジャンベ文化の拠点となっていると言える。

このジャンベの音楽を生徒たちは小さいころから聞き、小学校に入学すると、習い始める。部活動が制約を受けていない三島小中学校にとって、ジャンベを習う事は、部活動を行うのに等しい。重要な点は、このジャンベに触れるにあたり、

楽器を演奏する技術だけを学ぶだけではなく、楽器発祥の地（ギニア）の文化も同時に学んでいる点が、生徒の興味・関心を引き出し、モチベーションを内発的に高めていると考えられる。

また、ALTは半年に一回しか島に来ないが、年間20名～30名の外国人が観光・ジャンベ関係を含み、硫黄島を訪れ、生徒たちと触れ合う機会も多い。ALTとは会話中心の授業を構成することが多い。また、ICTを使った授業も行われており、衛星を使った授業により、島にいながら他国の人々と触れあう時間多くを作っている。

この事からも、硫黄島の生徒は、外国語に対する苦手意識の低さ・外国語を使うことや海外文化を受け入れる抵抗感の低さが言える。結果として、英語学習に対するモチベーションの高さの理由が伺える。

現在の英語教育においては、4技能のスキルの向上のみが注目されている。しかし、スキル追求の授業においては、生徒のモチベーションは決して高くはない。これは、生徒の内発的動機づけではなく、テストなどの外発的動機づけによる学習になっているからだと考えられる。この硫黄島の生徒の状況を英語教育に当てはめると、文化を通じた英語学習は生徒のモチベーションを高める効果があると言える。

具体的事例として、早期英語教育（小学校英語活動）が必修化され、多くの学校で始まっているが、現場の教師は指導法（特に中学校との連携）に困っているのが現状である。

また、隣の韓国では、早期英語教育の開始に伴い、多くの生徒（中学生）の英語学習に対するモチベーションの低下が報告されている。原因としては、担当教員の教え方・生徒とのニーズの不一致・

授業への準備不足・授業と生徒への無関心が挙げられている。同時に、保護者からの過度な英語力向上の期待も存在する。これは、韓国の早期英語教育が、学力重視（スキル重視）の指導に偏っており、文化などの英語自体を楽しむ・触れ合う授業構成になっていないからだと言える。

硫黄島においては、小学校時代に“ジャンベ”に触れ、他国の楽器に文化的な面から入る事により、英語（外国語）学習への苦手意識を持つことなく、中学校へ入学する事が可能と考えられる。

### (3) 離島における授業的課題

一方で、人数が少ない事に対するデメリットとして、中学1年夏休み以降の生徒のモチベーションの低さが挙げられる。これは、周りに競い合う相手が少ないのが原因であろう。

モチベーションの低さは、学力の低下につながると考えられる。特に、中学1年生の夏休み以降に学力の差が生じやすい。これは、夏休みまでは、新しい学校（中学校）に入学し、気持ち的にも頑張ろうとする気持ち（モチベーション）が高いが、ライバルの不在により、学力向上への意欲が低下してくるからだと考えられる。多くの学生は、夏休みは本土の塾に通う生徒が多いらしい。この時の本土との学力差も原因かと考えられる。よって、離島の生徒たちへの夏休みの課題の出し方を工夫する必要があると考えられる。

### (4) 離島教育（英語科）における展望

離島の学校教育において（英語科に関して）は、生徒のモチベーションの問題が重要な課題であるようである。外国語を受け入れる抵抗感が低いからと言って、英語の学力が向上するとは言えない。よって、中学校に入るまでの、児童・生徒

の学習ストラテジー（学習習慣・学習方法）を身に付けさせておくことが重要だという。

最も重要な事は、ジャンベで学んだ海外の文化に対する興味・関心を、中学校の英語学習につなげる（内発的動機づけを維持したまま）指導が、課題であると言える。

(5) おわりに

三島村硫黄島でお世話になった、鹿児島大学の先生方、共に島について学んだ院生の皆さん、役場の大山さん、ジャンベスクールの校長先生をはじめとするスクールの皆さん、三島小中学校の英語科の有馬先生、その他、島について説明をして頂いた皆様に感謝を申し上げます。

将来、学校教員になった際は、また硫黄島を訪れたいと思いました。本当に、ありがとうございました。

### 中尾 智（水産学研究科）

私は今回の硫黄島での実習において今まで授業や資料上でしか知らなかった「離島」について知り、多くのことを学ぶことができました。そして離島と本島との違いについて、離島が抱えている問題やそれに対する対策について考えさせられることが多く存在しました。私は今回の実習の中で離島における最大の問題は若い世代の不足にあると考えました。なぜならば、今回の硫黄島もそうですが高等教育を受けようと思えば必然的に島外に行く必要が生じてくるからです。それにより、島内に若年層が不足してくるのだと私は考えました。さらに、教育過程を修了した者が島に戻ってくるのかと聞かれば必ずしもそうであるとは言いきれずに、むしろ、戻ってくる人の方が少ないのではないかと私は考えます。というのも「職」という点で見れば島は圧

倒的に不便であると言えるからです。しかし、硫黄島はその点について「ジャンベスクール」や「しおかぜ留学」等の取り組みを行っており、私の想像しているイメージとは多少異なっていました。私は、他の島についてもその島独特の異なる対策が行われているのではないだろうかと考え、興味を抱きました。私は硫黄島で島民の方々と接する中で気づくことが多くありました。その中の一つに、話しを伺ってみると島の方々はみんな自身の島の発展について真剣に考え、他の人の意見に耳を傾けるという姿勢であったことです。私は今後の島の発展にはそのような真剣さが島外の人に伝播し多くの人に島が現在抱えている問題について認識してもらうことが不可欠であると考えます。

### 箕田 佐友里（農学研究科）

黄褐色の海が広がる港に入ると、すぐそばに集落があった。2日に1度、人や物資を運んでくれるフェリーを、島の人々が待っていましたと出迎える。硫黄島は島の北東に標高703mの硫黄岳があ

り、集落は南西に位置する港付近のただ1つである。そのため火山や温泉、椿林や竹林、野生の孔雀そして黄褐色の海など、自然やそれらの恵みが多く存在し、他の島には無い壮大であり特有の景色が



広がっている。

最も全国的に有名であるのは、名湯100泉にも選ばれている東温泉だろう。人里離れた場所に、波がすぐ傍まで押し寄せてくる秘湯は島の一、二を争う自慢かもしれない。他にも、山と海の絶景を見渡せる平家城跡展望所や恋人岬も素晴らしかった。島には自然を体感できる場所が多くあるが、その中で島外の人向けの施設もある。集落から少し山に入った所にある「冒険ランドいおうじま」だ。敷地面積21,000平方メートルにツリーハウスや貸出テントがあり、キャンプなど自然を体感できる場所となっている。鹿児島市が建設したものだが、硫黄島の自然に触れながら、子供達の心身の成長に繋がる事を目的とした教育型観光スポットである。硫黄岳の岩肌を間近に青々と茂った芝生、そこに小綺麗なツリーハウスが並び、建物内には過去に訪れた小学生達の感謝の手紙が飾ってあった。管理が行き届いておりキャンプ場としてはとても綺麗で、しかも料金も手頃であったので、利用したいと純粋に思った。このような素晴らしい施設ならば、もっとPRすればより多くの利用者が島を訪れるのではないか。正直もったいないと感じた。

このように硫黄島は、手つかずの自然と人が作り上げた自然と、両方の観光資源がある。また温暖な気候の下、豊かな自然と人々の暮らしがバランスよく成り立っている。漁業や農業など、この島だからこその特産品も特徴として挙げられる。その際、輸送の点で本土への普及はやはり難しいものがあるが、逆に島へ行くことへの価値が高まると言える。物産以外にも、島の人々の温かさを感じる事ができる。三島小中学校を訪れた際、子供達が大きな声で元気よくあいさつをしてくれた。そして大人達も、私が話しか

けると快く答えてくださった。豊かな自然に囲まれて暮らしている人々は、心も豊かになるのかもしれない。自然と人との共存が形になっている島である。

また日本でありながらアフリカの打楽器の音が響き渡っているのも面白い。平成6年、ジャンベ奏者のママディ・ケイタ氏が島に訪れて以来、硫黄島の新たな魅力として、その存在は島の人々にとって大きいだらう。特に子供達のジャンベへ取り組みは、島全体を活気づけている。今回の私達のジャンベスクール訪問の際も、留学生の方々による素晴らしい演奏で歓迎して頂いた。アフリカの文化が、日本の南の島の文化となっている。ジャンベは島のいろいろなイベントで演奏されているそうだが、島の伝統的な踊りや民謡と合わせてみるのもいいかもしれない。この島でのみのジャンベの演奏ができることができる。アフリカ文化との融合という、日本では珍しい新しい文化の形を硫黄島は持っている。島おこしとしては大成功と言えるだろう。他には無い、新たな方向で島を活性化している。

今回の訪問で唯一心残りなのは、島特有の伝統的民族芸能について、もっとお聞きすればよかったという事である。八朔太鼓踊りやその際に着ける大きな渦巻き模様の耳を持つ面殿を、一度目の前で見てみたいものだ。平成8年には中村勘九郎（現、勘三郎）氏らによる薪能「俊寛」が上演され、全国から歌舞伎ファンが集まり注目を集めた事は、島にとって大きな出来事であるだろう。毎年お盆に「俊寛の送り火」とされる柱松の行事が行われ、同時に盆踊りが始まる。枯れた大名竹でできた高さ16mの2本の柱に火を灯すと、気がつけば20m程に燃え上がり空を赤く染めるといふ。お祭りや民謡、郷土料理などの伝統芸能を保存していく

事は、硫黄島という資源の宝庫を、維持そして発展させていく基軸であるべきだと私は思う。新たな取り組みによる島おこしと共に、代々受け継がれてきた伝統文化を守り、多くの人に知ってもらいたい。自然に文化、硫黄島は観光資源がとても多い魅力溢れる島だ。隣島黒島については、島の豊かな植生が、天然記念物に指定されるかもしれないと聞いた。もし指定されれば、本土だけでなく海外か

らも注目されるようになり、より多くの人々に三島の魅力を知ってもらえる事ができる。ぜひ実現してもらいたい。1泊という短い研修であったがいろいろな分野に渡って見学させて頂き、それらを通して、島の人々の島おこしに対する意力を感じた。これからも島の人々の手によって、伝統と革新が調和した特有の島として、硫黄島は進化し続けていくだろう。

## 吉田 創平 (水産学研究科)

### (1) 硫黄島 概要

鹿児島県三島村に所属する離島であり、薩摩半島南端から南南西約 40km に位置する活火山島である。人口は平成 23 年度で 114 人であり、人口減少、高齢化が進んできている。戦前はトカラ列島を含む十島村に所属したが戦後、北緯 30 度以南をアメリカ軍が占領したために黒島、竹島を含め三島村として成立した。

主なアクセス方法は定期船である。鹿児島市と竹島、硫黄島、黒島および枕崎(本土)を結ぶカーフェリーであり、週 3 回(枕崎便は不定期)出航している。バブル期にヤマハリゾートの建設した空港も村営として存在し、チャーター機でのアクセスも可能。現在のおもな産業は椿油や大名竹の筍を中心とした林業、黒毛和牛の子牛生産を行う畜産業、およびイセエビ漁を中心とする漁業である。以前は硫黄岳から産出される硫黄、珪石を主産物とした鉱業で栄えたが、現在は閉山している。

### (2) 現在の主力産業とそれを生かした発展

現在の硫黄島における主力産業は畜産業である。これは肥育や搾乳を目的とし

たものではなく、黒毛和牛の子牛生産を目的とした畜産業である。

親牛は放牧地で放牧され、妊娠、出産後の体力が低下する時期には厩舎内で干し草などを与えられるが、それ以外の時期は粗放的放牧にて飼育される。硫黄島では離島であることに加え、野生動物が少ないこともあり、病虫害の発生は少ない。

主に出荷されるのは 10 か月程度の子牛である。この子牛は 2~3 か月ごろまでは放牧で育てられるが、それ以降は厩舎に移され、マニュアルに沿った餌の量で飼育されることで、ほぼ一定の品質の子牛が出荷可能となっている。系統選別とこの飼育方により畜肉種苗として「みしま牛」のブランドが確立されている。

放牧施設、厩舎いずれも村からの貸与であり、初期費用は小さく、少数からでも始めることができる。牛を出荷する際は村の畜産組合に、一任され、出荷手数料、諸々の賃借料が牛の販売金額から差し引かれ生産者へ振り込まれる。これにより、不動産管理、出荷の手間などは畜産農家にはあまりかからないようになっている。

島民所得の向上を第一に考えるならば、

このような制度があり、飼育方法等のマニュアルも確立している畜産業を中心に置いた発展を考えるべきであろう。初期費用が小さく、飼育方が確立しているうえに、ブランドとして成立しており一定以上の販売金額が見込める。そのため、畜産を行っていない島民、新規移住者にとってもリスクが少なく、参入する際のハードルが低いので、積極的な新規従事者勧誘を行うことで、畜産従事者を増やし島民所得の向上を図ることができるだろう。

### (3) 水産業振興に関する個人的意見

硫黄島で最も水揚げ高の多い漁業は9月から4月にかけて行われる刺網によるイセエビ漁である。イセエビに限らず島の周りは好漁場であり、一本釣り、曳縄、刺し網等の漁業も営まれている。それらの漁業ではカンパチ等青物や瀬物が漁獲され、臥蛇島あたりまで遠征を行うことでキハダのようなマグロ類も漁獲されている。

多くの離島と同じく、硫黄島でも条件不利地としての漁業経営上の問題を抱えている。まず、定期船による出荷を行うことから、時間的制約が生じ漁獲物の鮮度維持が難しく、定期船の出航に合わせた水揚げを行ったとしても、セリにかけられるのは翌日の朝であり、当日に水揚げされる本土側漁獲物よりも魚価が劣る。また、島内での消費量が少なく島外への出荷を余儀なくされ、その出荷にも本土ではかからない船や航空機による運賃が、出荷コストとして余計にかかる。そのため、離島域の水産業振興では鮮度維持の問題を解決する、付加価値を付ける、などの取り組みによる魚価の向上、コストの削減が重要となる。

まず、魚価を向上させる取り組みとし

ては以下のようなものが考えられる。

- ・鮮度維持に関する取組・・・活魚、活魚形態での出荷、シャーベットアイスの利用、等

- ・産地加工による付加価値付与

- ・自家販売、出荷市場の選択、等

実際に硫黄島で行われているものとしては、キハダ漁業の場合、漁獲した帰りに枕崎港まで足を運び、水揚げを行う。枕崎での値段により枕崎産地卸売市場で競売にかけるか、鹿児島市中央卸売市場へ枕崎から陸路で出荷するかを決める、というような出荷市場の選択が行われている。またイセエビに関しては専用の活魚コンテナを利用し、定期船で運搬を行うことで、活魚形態で鹿児島市中央卸売市場へ出荷されている。

硫黄島の水産物流通で問題となるのは、島周辺で漁獲されるカンパチなどの青物や、マダイなどの瀬物のような島の港に水揚げされる不定期、不定量の漁獲物であろう。これらの漁獲物はキハダのように自家漁船で枕崎まで運搬しても利益が出るほどには水揚げ量が多くないために、定期船による運送を行わざるを得ない状況となっていると思われる。

これらに対し、直接的な魚価の向上を目的とした場合、定期船を利用したイセエビ用の活魚輸送設備の流用や、漁船を用いて活魚形態で鹿児島市中央卸売市場まで輸送することが考えられる。しかしこの出荷形態をとる場合、いずれの場合であっても一定量以上の漁獲物を一度に出荷することができなければ、これまでの出荷形態から増大するコストを魚価の上昇で賄いきれなくなり、逆に利益を落としてしまうことになりかねない。そのため、産地で活魚槽や海上生簀を用いて、漁獲物を活魚形態にて集積することが必要となる。集積した漁獲物を活魚形態で

出荷することにより、鮮度維持に関する問題を解決できるほか、活魚であることの付加価値が付き魚価は向上すると思われる。また、活魚形態で保持することが

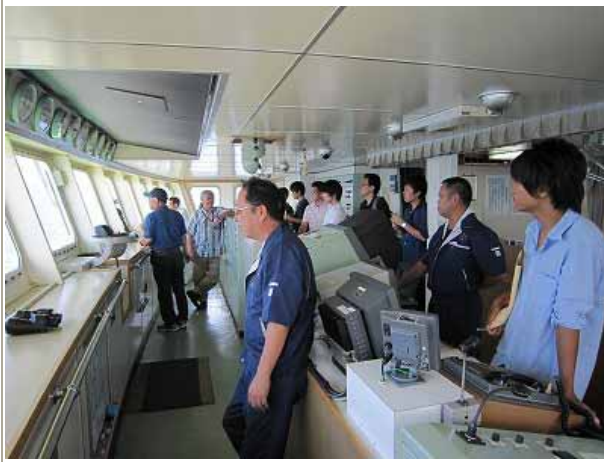
可能であるため出荷調整を行うことができ、市場価格が水揚げ状況により変動的である水産物市場であっても、ある程度の魚価の安定が望めるだろう。



三島村硫黄島講義  
写真集



# 三島村硫黄島講義写真集



フェリーみしまのブリッジ



船内で三島村の説明



硫黄島



硫黄島入港



硫黄島上陸



しまジャンバスクール(宿舎)





教育の説明



軽の大臣の墓



冒険ランドいおうじま



畜産施設



集落全景



ジャンベ体験



東温泉



民宿での夕食



俊寛堂



漁業説明



ジャンベで見送り



硫黄島出港



記念撮影

十島村中之島講義・  
学生のレポート



## ○十島村中之島講義・学生のレポート

### ☆十島村中之島講義の概要

鹿児島大学大学院全学横断型教育プログラム「島嶼学教育コース」の目的は、「南西諸島からアジア・太平洋島嶼域に関する様々な分野の授業科目を履修することにより、島嶼地域の要請に応え、国際島嶼社会でも活躍できる人材育成を目指す」にあります。しかし、「島」へ行ったことがない、という学生も少なくありません。そこで、コースのコア科目である「島嶼学概論Ⅱ」では、学生により深く「島」を理解させるため、講義の一部を十島村中之島でおこなっております。まず「フェリーとしま」で島へ向かい、中之島の皆様から島の現状を御講義いただき、そして実際に中之島を見てまわります。「島」を体験する、そして「島」を考える機会を設けております。

日程：平成24年1月13日（金）～15日（日）

参加者：伊藤彰宏（農学研究科 M1）  
武田 健（教育学研究科 M1）  
箕田佐友里（農学研究科 M1）  
吉田創平（水産学研究科 M1）

担当教員：河合 溪（国際島嶼教育研究センター）  
山本宗立（国際島嶼教育研究センター）

講義： 「島の住民生活全般」（永田和彦先生）  
「島の畜産」（平泉二太先生）  
「Iターン者としての島の生活」（古橋典保先生）

見学： 出初式  
牧場、トカラ馬  
コミュニティーセンター  
中之島小・中学校  
御岳  
水力発電所、御池  
十島村歴史民俗資料館

調査： 農作物（アセロラ、ダイジョ）  
英語教育・離島教育  
海産物の流通

## ☆学生のレポート

伊藤 彰宏（農学研究科）

### (1) 実習全体を通して

私は、今回の実習を通して、離島についてさまざまなことを経験させていただき、また考える機会を与えていただきました。

中之島は、海・山・川といった自然にあふれた島で、動物ではトカラ馬やトカラヤギなどが放牧されていて、また植物では島バナナなどがすぐそこに自生していました。島内には温泉もあり、島の人々が日常的に利用しているためか、とてもフレンドリーな印象を受けました。これも島ならではの良さだと感じることができました。

講義では、まずIターン者としての島の生活についてお話を伺いました。中之島での職業として漁師を選択し、最初はスキューバダイビングの経験を生かした素潜り漁で生計を立て、お金が貯まったら船を購入して本格的な漁に出られるようになったということでした。海に潜り、何時間かしたら少し休憩するというサイクルを繰り返しながら1日漁をしていたと伺い、私も少しですがスキューバダイビングをした経験があったので、その大変さを知ることができました。また、船を購入後で経験が浅かった時も、漁に出るときは魚群探知機の反応や海流などを予測して漁場を決めたり、その日水揚げした魚の種類や海の状態などを記録して次の漁に生かすといった努力をされていて、漁業に対する情熱に驚かされました。自分も将来職業に就くときは、このくらいの情熱を持って仕事をやっていきたいと思いました。一方で、漁師という仕事の大変さもよく分かりました。収入も不

安定で保険や福利厚生などもなく、睡眠時間も短くシビアな職業で、漁に出られない日は体のトレーニングを欠かさないとのことでした。しかし、時間に拘束されず、自分の好きなペースで生活できていて、いずれは後継者に自分の技術を伝えたいという目標を持っていると伺い、この中之島での生活がとても充実しているということがとても伝わりました。

次に、島民の生活全般についてお話を伺いました。まず、教育面では、中之島には高校がないため、中学校までは島で過ごし、その後は鹿児島市の高校への進学が主だと分かりました。その際、島から同じ高校に同級生が進学するというのは少ない中で、どうやったら高校でも孤立せずにやっていけるかという問題があり、その解決策として「何か1つでも得意なことを作ってあげる工夫」ことに重点をおいていると知りました。実際にお話していただいた方は、小学生にバドミントンを指導されていて、これが島の教育面での工夫なんだと分かりました。トカラ列島の島には、分校も含め十数校の学校があり、そのうち諏訪之瀬島と小宝島にある分校が本校よりも生徒数が多いという逆転の現象が起こっていました。また、島にとって子供は重要な存在で、島内の行事なども子供たちが中心となって、大人も参加するという形ができていて、子供達が島に活気を与えていることも分かりました。

生活面について、職業はほとんどが第1次産業(農業・漁業)で、残りはサラリーマン(発電所、郵便局員など)で、畜産に関しては衰退気味であるということでした。

た。高齢化が進み、畜産では規模が最盛期の3分の1程度まで落ち込んでいて、島の土地が有り余っているのが現状でした。これら生産物の流通の面でも、離島では島外に売り出すことによる輸送費などのコストが大きく、ほとんどが島内での消費または自己消費で行われていることが分かりました。また、離島での大きな問題である医療面についても、医師が常に同じ島にいるわけではなく、定期的に島を回っていたりするなど、高齢者の多い島においてまだ多くの課題があることが分かりました。

## (2) 中之島小・中学校でのバドミントン指導

今回の実習の中で、偶然にも小学生にバドミントンを指導する機会がありました。私は、中学校から大学までバドミントンをしていました。その経験を生かして、島のためにも貢献できるかなと思い、引き受けました。その中で印象的だったのは、指導した男の子がとても熱心に練習に取り組んでくれたことです。私自身、指導した経験はほとんどなく、うまく伝えきれているか不安でしたが、積極的に何回も同じ練習を繰り返し、身につけようとしてくれていました。離島であるため、他の学校との対外試合や合同練習に参加しづらい環境の中で、わずかな時間で一生懸命練習している姿を見て、とても嬉しかったです。少しですが、指導者としてのやりがいを味わえたので、いい経験ができたと思います。

## (3) 修士論文研究材料の収集

私は、修士論文研究でアセロラの研究

を行っています。今回、偶然にも中之島でアセロラを栽培していらっしゃる農家さんがあると聞いて、伺いました。ここでは、タンカンやビワなどの果樹が栽培されていて、アセロラも6~7株ほど植栽されていました。株は鹿児島に加世田から送られてきたもので、そこから挿木で増やし、品種は分らないとのことでした。そこで、数本の枝を頂いて持ち帰り、現在は研究室で挿木して増やし、今後の実験に利用できればと考えています。葉は、DNAを抽出してDNA分析を行っています。これまでに多くの品種・系統を品種識別してきているので、この分析で類似した品種があれば、今回頂いたアセロラの品種が特定できると思います。一方で、類似した品種がなければこれまでに見つからない新品種にもなり得ます。まだ、分析途中の段階なので、これから結果が楽しみです。品種の特定ができれば、結果をお伝えできればと思っています。お忙しいところ、急遽押しかけたにも関わらず、親切にして頂いた農家の方にはとても感謝しています。

## (4) おわりに

私の中で、今回の実習は短い時間でしたが、非常に充実したものとなりました。離島に行くことがほとんどない中で、このような経験をできてとても良かったです。これも、お忙しい中講義をして頂いた先生方をはじめ、実習に関わって頂いた島のみなさんのおかげだと思っています。この経験を今後にも役立てていきたいと思っています。本当にありがとうございました。



私が勤務したい離島の学校って、どこ・・・??

1月13日(金)～15日(日)において、鹿児島県中之島において、島嶼学講義を行った。大学院全学横断講義ということで、農学部・水産学部・教育学部からの多様な学部からの参加となった。教育学部から参加した私は、教員希望であり、更に離島校に勤務をしてみたい事から、この講義は離島教員の体験と言い換えることも可能であろう……。鹿児島県を真夜中に出発し、中之島はフェリーで約7時間の船旅である。かなり遠いという印象である。しかし、どの様な場所なのかは見当がつかない。気持ちは、1人離島に向かう教員の心境とでも言うのが正しいのかもしれない。

中之島に到着は、朝7時頃であった。中之島消防団の出初め式を見学後、Iターンの古橋さん、議員の永田さん、畜産を営んでいる平泉さんの話を伺う事が出来た。

古橋さんの話の中で印象深かった点は、離島での仕事は、全てを自分で組み立てられる点がメリットであるが、全ての責任も自分でコントロールしなければならない事である。後輩育成にも力を入れたいとおっしゃっていたので、島の未来に明るい希望が持てる。更に、講義の際に漁業で使用している実際の道具を見せながらの講義は学習者にとっては効果的である。実物を見せながらの説明が効果的であることは、教員としての授業作りの参考にもなった。

次に、永田さんの話で印象深かった点は、離島の少人数校から、本土の大規模校に移った際、自分の居場所を確保する為の武器(特技など)を持っていると効果

的な点である。これは、大規模校で居場所が無いと考えている生徒達にも有効な策であろう。更に、自らの実体験を通しての説明は、聞き手に対して親近感を与える事ができるので、質問がしやすい状況になるとして授業作りの参考になった。

最後に、畜産の平泉さんの話の中で印象深かった点は、その講義スタイルである。教員希望の自分にとっては、新たな講義スタイルと言っても良い。「君達の聞きたい事を質問して良いよ」と、完全オープン講義スタイルは、学習者の興味・関心が最大限に生かされるメリットがあると考ええる。

以上の三人の講義は、島の様子を知ることが出来たのと同時に、多くの授業作りの参考になった講義内容・方法であった。

また、中之島小中学校の先生方(校長先生・教頭先生)にお話を直接伺う事が出来た事は、一番の収穫と言っても良いだろう。離島に勤務したいと考えている学生と実際に離島に勤務されている現職の先生との意見交換は大きいと考える。

校長先生がおっしゃった「あなたが考えている離島校勤務地は、中之島を含むトカラ列島の離島校勤務を指しているのですか?イメージとしては、屋久島・種子島・奄美大島などの離島の学校を指しているのではないですか?」という問いが、離島の学校の現状を象徴している問いと言っても良いであろう。鹿児島県の教員の特徴の一つである離島校勤務。一見、雄大な自然と時間的なゆったり感のイメージから離島校希望を出す教員も多い。しかし、現実的に人気があるのは、三島村・熊毛郡・奄美群の離島が大半を占めているらしい。確かに、交通の便な

どを考えただけでも理由は納得できる。加えて、離島に勤務希望を出す頃には、教員はある程度の年を重ね、家庭の問題（妻・子どもを同伴させるか、市内に家を購入していたらどうするか）などの実質的に発生し、直前で断るケースが多々あるらしい。

また、離島における教員は、「先生」なのか「教師」なのかという考え方が大きく影響すると言う。これは、本土の学校においても同様である事は間違いない。「先生」と言うのは「勤務時間内は子ども達と接して授業等を行うが、勤務時間外は自分の時間を優先してしまう人」、一方、「教師」は「勤務時間内も授業で子どもたちと接するが、授業時間外（勤務時間外）の方で、子どもたちと親密に関わり、勉強以外の事を指導している人」を指すらしい。たしかに、言われてみれば、印象に残っている（尊敬している）教員は、授業が上手かった“先生”と言うよりは、勉強以外で親身に相談などにのってくれた“教師”と言うことが出来るかもしれない。離島の教員は、1人1人の子どもたちと接する時間が本土より多く、加えて、関わりの密度も濃いと考えられる為、この「先生・教師」のどちらになるかで、関係作りが異なると言える。

また授業の本質を離島に来れば、見出す事が可能である。一見、授業における重要性は、経験に基づいた授業の腕（経験）であるように若い先生は考えがちであるが、授業の本質は“生徒との対話”、つまり、生徒とどれだけ関係を築く事が出来るかにかかっていると言う。当然と言えば当然の様だが、忘れてしまう事が多い。これを、証明するのは、教育実習であろう。実習生が、実習校の校長先生・教頭先生に見られているにも関わらず、授業が成功するのは、生徒たちとの実習

期間内に築かれた関係の濃さが、授業に影響しているからだと考え事が可能である。

中之島小中学校に通っている、中学生3年生の女子生徒に“英語学習に関するアンケート”を取る事も出来た。離島学校ならではの利点・問題点が浮き彫りになった結果である。永田さんもおっしゃっていた事であるが、やはり少人数によるモチベーションの問題は避けては通れない。しかしながら、こちらの女子生徒さんに関しては、英語に対するモチベーションがかなり高く、少人数であることをメリットと考えている。授業における少人数のメリットは“分からない時にすぐに質問が可能な点”、デメリットは、“全ての質問に1人で答えなければならない点”と答えている。また、島を出て高校に進学する際の不安要素として、“島で1人だった為、授業について行けるかを不安”と考えている様である。

やはり、離島教育における最大の利点は、教師と生徒の授業スピードが一致させられる点である。生徒の理解スピードにおいて、教師は授業を進めることが可能である。この方法によって、生徒の理解をより深めることが可能になると考えられる。一方で、デメリットとしては、メリットである個別学習に近い授業スタイルから、大規模校の高校に進学した際の心配は避けては通れない事である。少人数から大人数の中での学習の環境変化は、学習者に心的ストレスを与えることが予想される。この点が、離島の学校だけでは解決が難しい課題と考える事が出来る。

また、中之島小中学校は、電子黒板も完備されており、本土の学校と教育設備は変わらない。パソコンも数台設置されており、生徒は十分な学習が可能な環境

があった。学習環境に関しては心配する事はないように思える。

今回の講義で、自分が目指していた離島学校の現実を知ると同時に、離島教員の現実を知ることが出来た。離島教員と言っても、島によって環境はかなり異なっているという事である。よって、将来的に、自分を含め多くの教員は離島には行きたいが、トカラ列島を素直に選べるかは、正直微妙である。この事に関して、教員なら悩んでしまうのも分からなくもない。教師は生徒がいるならば、どこにでも行くのが教師の本質であることは分かっているが・・・。

しかし、中之島を訪れることで、離島

を体験できたことは大きい。校長先生・教頭先生の話聞くなかで、離島（トカラ列島）の教員は、教員のやりがいや他の島よりも得られる様な気がしている。鹿児島県の教員を目指すものとして、将来、希望が叶うならば、喜んで、トカラ列島に行ってみようではないか！！それこそ、離島勤務をしたいと言う資格のある教員と言えるというものである。

最後に、中之島の説明をして下さった古橋さん・永田さん・平泉さん、中之島の小中学校の現状を話して下さいました校長先生・教頭先生、中之島でのお世話を下さった寄田さん、3日間ありがとうございました。

### 箕田 佐友里（農学研究科）

次のような記述を見た。「種子・屋久では祝事や儀礼に山芋を用いる。トカラでも元日に山芋のトロロのつけあげを作って内神に供える。」（下野 1980）しかしお聞きした島の方達は、皆首をかしげた。中之島以外の慣習なのか、それとも既に廃れてしまったのか。

文化はその土地に生まれ、外部と交わり拡大や流出を繰り返し、その形を時代に合わせて変えていくものだ。ただ、島という、長い歳月で見ても外部との交流が限られている環境では、独自の文化がじっくりと育まれ、後世へと大事に引き継がれていく。それらは他には無い、味わいと存在感を持っている。

「こんな紫色して、食欲わかないねえ」と笑いながらおっしゃったのは、食事のお世話をしてくださった里さん。二種類のコーシャマンを、夕飯に出して頂いた。コーシャマンとはヤマノイモの一種で、ダイジョというイモの方言名である。この呼び方は琉球諸島の方から入って来た

証と言えるが、昨年鹿児島本土から新しく入れた系統に対しても、同じようにアカコーシャマンと呼んでいた。NPO 法人の方が、トカラの特産品を増やしたいという思いから導入されたそうだ。



コーシャマンの畑



紫色が濃い系統（左）と薄い系統（右）

昔から中之島では、このコーシャマンを家庭菜園程度ではあるが栽培しており、トロロなどにして食べられてきた。トロロなど生のまま食べる利用方法は、温帯産ヤマノイモの食べ方である。つまり呼び方は琉球由来、食べ方は本土由来という事になる。

私は導入系統に対して勝手に在来系統と呼んでいるが、実を言うと、何年前にこの島に入ったのか定かでないため、「在来」を付けていいのかわからない。またトカラ列島は田芋文化圏のため、特産品としてもその名は上がる。少し集落から離れた道を行くと小さくも多くの畑に、そのまん丸とした葉を茂らせていた。それに比べてコーシャマンの畑は自力では探せず、細々と作られているようだった。

しかし、中之島という地に食文化の一つとして根付いているのは事実のようだ。多くの方にお聞きしたわけではないが、私が伺った方は皆さん「ああ、あちらの家でも作っているよ。美味しいよねえ」とおっしゃっていた。

ちなみに屋久島では、在来の系統（方言名ツクリヤマイモ）とは別に、数十年前に本土から導入したインドネシア由来の系統を栽培している。現在では島の新たな特産品として定着しつつあり、冷凍

とろろとして本土にも売り出しているという。

在来系統もこの島に入って来た時は、新しい物だった。今回導入した系統も、数百年後には在来系統と呼ばれるようになるのかもしれない。

ここまで自分の興味のあるイモの話をつらつらと書いてしまったが、島にとって「新しいもの」と「伝統的に受け継がれてきたもの」はどのような立ち位置なのか、イモを見ていて思った。

島の活力をより高めるためには、新しさは必ずいる。文化に限らず産業における技術など、その時代時代に生きるため、どのような土地でも情報をチェックし適応し続けなければならない。特に島という離れた場所では、取り入れないと世の中から取り残されてしまう。ただ、島の人々自身が、新しく導入された文化や技術をどう受け入れ、活かし、広めていくのかが大切だ。島のためになるかを見極めた上で、自主的な姿勢で吸収し拡大すべきだろう。

また地域活性化の点で忘れてはならないのは、その土地固有の魅力、つまり長年培って来た土着文化のアピールだ。昔から愛されている習わしや芸術、食べ物などは、その地に生まれ育った人々にとって誇りだろう。また同じ日本の中でも全く同じ文化は無く、それでいて何か懐かしいもの、物珍しいものに人は惹かれる。特にトカラ列島は、南からの琉球文化、そして北からの薩摩あるいは大和文化の異なる流れが、出会い混じり合った、とても貴重な形を成している地域だ。屋久島とも違う、奄美大島とも違う、また列島の島全てに違う価値がある。その島の自然や人が作り出す力に、訪れた人は必ず感じる物があるだろう。

島で暮らしていない人間が、もったい

ないから伝統的慣習を守り続けて欲しいというのは、とても勝手な話かもしれない。しかしそれだけ島民以外の人間から見ると、珍しく素晴らしい、興味を引きつける力があるのだ。

今回の研修は1泊という短い滞在であったため、イモに関する満足のいく調査はできなかった。そのためまだまだ検討

の余地はあり、農学的また民俗学的にとっても興味深い糸口を発見できたと言える。そして個人的な関心もだが、ぜひとも昔ながらの系統、栽培方法、食べ方を後世へと長く残していくことを希望する。

島だからこそ、伝統的慣習を守り続けるところに重点を置き、固有の魅力を持った活性化を目指してもらいたい。

## 吉田 創平 (水産学研究科)

### (1) 中之島概要及び現状

中之島(なかのしま)はトカラ列島に所属する島であり、島の周囲は30km、面積34.47km<sup>2</sup>の鹿児島県内の離島である。島の最高点は御岳(トカラ富士)の979m。人口はトカラ列島の中で最も多く167人、世帯数は97世帯である。温暖多雨な気候であり、農業、漁業などの第1次産業が基幹産業である。島嶼域であり病虫害が少ないことを生かした畜肉用子牛生産や黒潮海域にあり資源量の豊富な漁場を持つことから縦縄によるマグロ釣りなどが行われている。島へのアクセスは週に2便のフェリーであり、鹿児島市内を出港したのち約7時間かけ中之島まで到着する。観光資源としては中之島と宝島にしか現存していないトカラウマ、トカラ列島特有の文化や歴史を堪能することのできる歴史民俗博物館などがある。また、島全体が優良な漁場となっているため、釣り客の需要も満たしている。

教育面では小中学校が島内にあり現在小学生14人、中学生が1人の計15人が島内の学校に通っている。しかし、高校、大学が島内になく(トカラ村内にも無い)、中学校を卒業したのちに本土の親戚の家やアパートを借りて鹿児島市内の高校へ通学するのが中之島では一般的となっている。昔は公立校が中心であったが現在

では助成金や収入の増加を受け私立へ進学する例も増えてきている。島内の小中学校は地域行事の中心の場として機能しているため、学校が廃校になることで地域行事が行われなくなり地域の活力が失われてしまう。

### (2) 中之島における水産業に関する提言

今回中之島を訪れ、幾人かに話を聞かせていただく中で、中之島でも宝島と同じようにトビウオを高鮮度で出荷しようという試みから急速冷凍機を導入しようという話が出ている、ということを知った。しかし、急速冷凍とはいえ、冷凍品として出荷することが本当に付加価値の増大に繋がるのだろうか。また、急速冷凍機を導入する場合、性能の高い冷凍庫も同時に導入する必要があり、電気代や設備維持費でランニングコストもかなりの額が必要になる。

私の考えでは、離島において、トビウオなど多獲性魚種を輸送時間によっておこされる鮮度劣化を排除し、付加価値を高める出荷方法としては、今回行われようとしている急速冷凍による高鮮度冷凍出荷と産地加工による高付加価値化があげられる。急速冷凍による冷凍出荷では、トビウオのように特定の季節に大量にとれる魚種を冷凍庫を利用し出荷調整を行

うことで大量に漁獲があり値崩れした際に出荷を停止することができ、ある程度は出荷価格の調整を行うことはできるだろう。しかし、市場においての値は生鮮の物に比べると低くなり、漁業者にとっても大幅な収入増は難しいだろう。

一方の産地加工では、急速冷凍機と大型冷凍庫ではなく、加工品に対応した加工場が必要となる。トビウオを原料とした場合、需要の大きい加工品はさつま揚げやかまぼこなどの原料となるすり身と長崎などで多用され、全国的にも消費量が増えつつあるアゴ節であろう。すり身、節加工、いずれの加工を行う場合であっても急速冷凍と同じで新たな設備投資は必要となり、そのランニングコストも必要となる。しかし、加工品（特に節製品）には大きな付加価値が付き冷凍品として出荷するよりも大きな利潤が期待できる。また、産地加工を行う場合、加工場にお

いて魚の下処理や機械の運用で雇用が発生し、島に仕事がなく島外へ出ていかなければならない、という雇用問題の改善にもつながる。

前期の講義で硫黄島を訪れた際にも同様に急速冷凍機を導入したいという話を伺うことができた。しかし、需要があまり大きくないと思われる冷凍トビウオ市場に対し、宝島、中之島、硫黄島、と次々と参入していった場合、その市場では供給が需要を容易く追い越し飽和状態になってしまうことが予想される。飽和状態となった市場では価格競争が始まり、安売り競争となり次第にコストギリギリとなったり、赤字経営に陥ることになる。そうならないためにも、産地が進むべき道筋は成功した他の事例の模倣ではなく、差別化した独自の出荷形態なのではないだろうか。



十島村中之島講義  
写真集





# 十島村中之島講義写真集



フェリーとしま(13日 23:50 鹿児島発)



十島開発総合センターにて朝ごはん(里喜美恵さんに作っていただきました)



トカラウマ



御岳を背景にして



十島開発総合センター(講義および宿泊地)



出初式の前に農作物調査 1: 島バナナ



出初式の前に農作物調査 2:みずいも(たいも)



出初式



放水



授業風景



古橋典保先生



永田和彦先生



平泉二太先生(右)



中之島小中学校



中之島小中学校では教頭先生にお話を伺いました



御岳の硫黄採掘跡を見学するつもりでしたが、濃霧により中止しました



里さんがダイジョ(こうしゃいも、あるいはこうしゃまん)を調理してくださいました



紫系統で、近年に導入されたとのこと。昔からある系統は白色だそうです



調理場が講義室に変わりました



晩御飯



ダイジョのとろろ



ものすごい粘りで、このように持ち上げることが可能でした。とてもおいしかったです



温泉(西区)



出初式の夜の集まりにも参加させていただきました



里さん自家製のみずいも(たいも)のお焼き  
(右下)



永田さんが現在バドミントンのコーチをしており、  
学生の一人がバドミントン経験者だと判明したため、  
急遽特別コーチに任命されました



小中学校の体育館にて



バドミントンの指導



ダイジヨの畑。ほとんどの株が枯れていました



ダイジヨの芋



帰りの船が入港



船内、少しゆれました



集合写真(2012年1月15日)

(参考)

共通教育科目  
島のしくみ





## 参考

### 共通教育科目「島のしくみ」(集中講義)

#### 講義内容

鹿児島大学島嶼教育研究センターでは、これまで島に関する多くのプロジェクトを実施してきた。2002～2004年には与論島を中心とした南西諸島でプロジェクト「多島域における小島嶼の自律性」を実施した。与論島で調査を実施するなかで、与論島を教育の場として活用できるのではないかとの発想に至った。島嶼教育研究センターは共通教育で、「南太平洋多島域」を開講している。講義では写真やビデオを用いて、わが国の南西諸島を含む太平洋地域の諸問題について講義を行っている。しかし、島に関する知識や体験が少ない学生にとって、これらの講義を聞くだけでは、島を身近なものと感じるには限界がある。講義では受講生が離島に関心を持ち、実際に島を訪れてくれることを期待して講義を行っていることから、島に出かける機会を提供することを目的として、与論島での集中講義「島のしくみ」を企画した。

与論島には町立診療所があったが、民間の医療機関の充実などの理由で平成14年4月に閉鎖され、その施設の有効利用が検討されていた。与論町は鹿児島大学に研究施設としての利用を要望し、平成18年に2月に施設活用に関する協定書を交し、鹿児島大学与論活性化センター

となった。施設の公式な開所の前であったが、平成17年度から利用が可能であったことから、集中講義「島のしくみ」を平成17年度から開講された。

島嶼教育研究センターが企画した集中講義「島のしくみ」は、学外の非常勤講師に鹿児島大学で講義をしてもらうということから、さらに一歩進め、フィールドとしての島(アイランドキャンパス)で、島で活動している非常勤講師に島で講義を実施してもらい、それを集中講義の単位として認定しようというものである。

この集中講義は与論島に出かけて実施し、日程は定期船を使い、船中2泊と与論島3泊の5泊6日である。集中講義では与論町における行政、文化、観光、農業、漁業の現在と今後について与論島の経験豊かな実務者の講義と現場の視察を行っている。学習目標は以下の5項目である、(1) 与論島の特性を理解する、(2) 与論島で実施されている企画や試みについて学ぶ、(3) 与論島をはじめとする離島の状況について理解を深める、(4) 島嶼域の振興施策について学ぶ、それに(5) 自分が居住している地域についても関心を深める。

## シラバス

■開設年度		■開講部局	
2011		共通教育	
■科目名			
島のしくみ			
■英語科目名			
An island' s system			
■前後期		■開講区分	■科目形態
後期		集中	講義
■単位数		■大分類(科目)	■中分類(分野)
2		教養科目	分野3
■受講学部学科			
全学部16名			
■担当教員		■担当教員所属	
野田伸一		国際島嶼教育研究センター	
■連絡先(TEL)		■連絡先(MAIL)	
099-285-7390		snoda@cpi.kagoshima-u.ac.jp	
■オフィスアワー(授業時間外の対応)			
【オフィスアワー】講義に同行するので随時対応します。 【メール】メールによる質問はいつでも受け付けます。 【授業後】授業後または個別にアポイントメントも可能です。			
■共同担当教員			
国際島嶼教育研究センター教員(長嶋俊介、河合 溪、山本宗立)			
■キーワード1		■キーワード2	
視野・判断力・探求能力		社会的貢献意識	
■授業概要(目的・内容・方法)			
<p>鹿児島県の特徴として鹿児島市とそれ以外の自治体の規模の違い、それと離島の存在があげられる。鹿児島県では鹿児島市への人口集中に伴い、郡部の過疎化と高齢化が進み、大きな不均衡が生じてしまった。この状況は離島ではさらに著しいものとなっている。鹿児島県の多くの離島は自治体の合併によっても効率化は期待できないであろう。しかし、環海性、隔絶性、狭小性などの制約の中で、離島では優れた自然環境の中で貴重な歴史文化を育てており、地域の多様性が保全されている。また、離島の地域社会では伝統的な共同体が地域活性化の原動力となり、自らの英知と努力により多種多様な地域おこしの取り組みが行われている。鹿児島大学も直接・間接にかかわっている。この授業では与論島の経験豊かな実務者による講義が中心となっており、与論島の現況や取り組みについて理解するとともに地域社会の在り方や活性化について考える。</p>			
■学習目標			
<ol style="list-style-type: none"> <li>1) 与論島の特性を理解する。</li> <li>2) 与論島で実施されている企画や試みについて学ぶ。</li> <li>3) 与論島をはじめとする離島の状況について理解する。</li> <li>4) 島嶼域の振興施策について学ぶ。</li> <li>5) 自分が居住している地域と関係づける。</li> </ol>			
■授業計画(15回に分け、回数、授業内容、自学自習等)			
この授業は与論島に出かけて実施し、日程は定期船を使い、船中2泊と与論島3泊の5泊6日となる。この授業で与論町における行政、文化、観光、農業、漁業の現在と今後について与論島の経験豊かな実務者による講義をおこない、現場の視察も実施する。実施時期は、後期開始前の予定である。			
■受講要件		■成績の評価基準	
		与論島での講義や施設見学を踏まえた地域活性化の方策に関するレポートを提出する。このレポートで評価する。	
■教科書		■参考書	
関係資料のプリントを用意する。		なし	
■その他			
受講希望者にレポートを提出してもらい、それによって16名を決定する。学外での講義となるので学生保険の加入者であることを受講の条件とする。			

## 講義日程

平成 23 年度講義内容

日程：平成 23 年 9 月 24 日（土）～29 日（木）

講義と講師：「与論の町政」南 政吾（与論町長）

「与論の観光」田畑克夫（ヨロン島観光協会）

「与論の農畜産業」竹下義秀（JA 奄美与論事業本部）

「与論の漁業」（漁業共同組合）

「与論の歴史・文化」麓 才良（郷土史家）

（与論島最高地点・のろし台・赤崎海岸・上城・与論城で講義）

施設等見学：漁港・有村酒造・役場・サザンクロスセンター

日本マルコー・消防署・堆肥センター・大金久海岸

民俗村・淡水化施設

## 与論島「島のしくみ」講義写真集



鹿児島大学与論活性化センター



講義風景



受講生(百合ヶ浜)



講義(行政)



講義(観光)



講義(農畜産業)



講義(漁業)



講義(文化)



史跡見学



民俗村



漁港



堆肥センター



淡水化施設



消防署



焼酎醸造会社(有村酒造)



誘致企業(日本マルコ)

